

# 有島武郎著作集第十五輯『芸術と生活』を読む(二)

——「宣言一つ」を中心として——

宮 野 光 男

かつて、「解釈と鑑賞」に発表した「宣言一つ」論(註一)は、

このエッセイの収録されている有島武郎著作集第十五輯『芸術と生活』(大十一・九)のエピグラフとの関連において、「宣言一つ」を抜き出して論じたものであるが、この度は、前論(註二)を踏まえながら輯全体の十五篇のエッセイを視野に入れつゝ、エピグラフとの関わりにおいて考察し、有島の「詩と試論」のひとつとして位置づけてみたい。

前論においては、エピグラフとして掲げられている詩篇「未来の詩人たちよ」の意味をより明確に表現していると思われるホイットマン詩「成熟した詩人が現れたとき」に関連させながら、有島のきたるべき詩人への期待の内容が、言葉に生命を与え、人間関係を可能ならしめる者、つまり、とりなしとしての存在、仲保者としてのそれである、と述べたが、しからば、この輯に収録されている一五編のエッセイは、それを必要としている者、あるいは状況をクローアスアップすることを目的としたものであり、それを、より印象的に表現するための、相補関係を持ったエッセイ群になっているのではないかということ以下、一五篇のエッセイの分析を通して明らか

にしてみよう。

有島武郎著作集第十五輯『芸術と生活』の構成は以下のようになっている。

- (一) 「芸術について思ふこと」(一九二二・一「大観」)
- (二) 「芸術の不変性(能楽文芸講演会に於て)」(一九二二・一「謡曲」)
- (三) 「描かれた花」(一九二二・七「改造」)
- (四) 「生命によつて書かれた文章」(小品)(一九二二・七「文化生活」)
- (五) 「心に沁みる人々」(一九二二・八「中央公論」)
- (六) 「小児の寝顔」(一九二二・四「文化生活」)
- (七) 「余裕と文化」(一九二二・六「文化生活」)
- (八) 「筆頭語」(一九二二・八「新文学」)
- (九) 「互ひの立場を認めよ」(一九二二・五「文化生活」)
- (十) 「己れを主とするもの」(一九二二・六「文化生活」)
- (十二) 「生活といふこと」(一九二二・十一「文化生活」)

有島武郎著作集第十五輯『芸術と生活』を読む(二)——「宣言一つ」を中心として——

(十二) 「自然と人」(小品) (一九二二・八) 「文化生活」

(十三) 「宣言一つ」(一九三二・一) 「改造」

(十四) 「片信」(一九二二・三) 「我等」

(十五) 「想片」(一九三二・五) 「新潮」

これらの十五篇のエッセイを大別すると、三つのグループになる。

そのひとつが(一)「芸術について思ふこと」から、(十二)「自然と人」(小品)までの十二篇で、これらのものは、かならずしも執筆年月日順ではないが、内容的に「宣言一つ」以前を形成していることになる。次が「宣言一つ」、三番目が(十四)「片信」、(十五)「想片」であり、「宣言一つ」以後ということになるように思われる。

「芸術について思ふこと」において、有島は芸術は本質において生活に等しいと語り、魂論、反逆者論などから「惜みなく愛は奪ふ」を通して辿ってきた有島の芸術論が展開されている。

このエッセイの冒頭において有島は、

表現派、未来派、立体派といふやうな形で現はれ出た芸術上の運動には色々な意味が考へられると私は思ふ。それについて私の考へてゐる所を述べて見る。( )

と書いているように、このエッセイが、著作集第十五輯の序論的位置にあり、有島の基本的芸術論(文学論)を見ることができるところである。

有島は、このところで、〈表現派〉が、〈主観の深刻なる徹底によつて、物の生命を端的に捕捉しようとして勉めることに於ては互に符号した共通点を持つてゐる〉各〈流派〉のなかでも、表現派こそ〈代表〉であるという。それは、〈生命そのものの物を通しての直接の表現であらうとする〉ものであり、

長い間現象の一分子と見做されてゐた個性が、独立した存在として、一個の有機的な統合の中に現存し得ることを主張するその叫びである。個性に君臨しつゝ、あつた軌範に対して、逆に個性が君臨せんと企てた反逆である。( )

という意味で、これは、有島の魂論、反逆者論の総括だということになる。

有島はさらに筆を進めて、〈表現主義の勃興を〉可能にする者が、〈第四階級〉者であるという。

表現主義の勃興を私は更らに他の一面から眺めることが出来るやうに思ふ。それは新興階級(私はこの言葉によつて所謂第四階級と称せられるものを指す)の中に芽生ゆべき芸術を暗示するものとして眺めることだ。

有島の見方からすれば、〈表現主義の芸術は在来芸術から能ふ限り乖離しようとしてゐる点に於て、現代の支配階級の生活とかけ離れた芸術であ〉り、〈表現派の芸術は恐らくそれら(既成の価値、

歴史、社会（筆者註）の人々に取つては異邦の所産であるであらうというわけである。

つまり有島にとつて、芸術、あるいは芸術家とは、必ず其内の生命と云ひますか中心と云ひますか、其内部に働いて居る所の一力を、それを衣して居る所の表現或は技巧といふものがあり、（内部的の生命とそれからそれを衣して居る所の表現若くは技巧といふものは、私共の仮に類別して名けた所の名であつて、それは渾然として離るべからざるものである）（「芸術の不変性」）もので、その本質は内部生命そのものだといふのである。つまり、芸術家とは、如何なる問題若しくは仕事に対しても、自己内部の本然的な力を以つて当たつて行く人で、その力の働きの中に自己の表現を求むる人（「余裕と文化」）である、というわけである。もちろん、それが、第四階級者であるというのであり、

一個の人間なり社会なりを本当に尊からしむるものは、その生活に齎せられる余裕ではなくして、その余裕の中に働く所の力如何によつて決定される。若しこの力が欠けてゐたならば、如何に人類の外部状態が改善せられても到底所望の彼岸に達することは出来ない。（）

というわけで、たんなる形式論ではないことは云うまでもないことである。

この、有島が言うところの芸術家、すなわち「個性の内的衝動」

有島武郎著作集第十五輯『芸術と生活』を読む（二）——「宣言一つ」を中心として——

の（醇化された表現（「想片」）を可能にするものが、（本能的生活者の創造に関わる基本的営みの説明である（個性）が、（外界の刺激によらず、自己必然の衝動によつて自分の生活を開始する。私はこれを本能的生活（impulsive life）と仮称しよう）（「惜みなく愛は奪ふ」一二）という考え方と、本質的には等質であり、同時にそれはまた、かつて有島が述べた（「反逆者、（ローファー）のイメージにも通じる存在であることを思うときに、「芸術と生活」所収のエッセイが、有島の理想とする人間像の延長線上に位置する、本能的生活者を現実生活のなかで具現化したものの提示であるということができるように思われる。

それがいかにして可能であるのか、と問うならば、有島はつぎのように答えるのである。

心が一元的になる時が来る。（中略）それを私は本能的の生活と名づけるのだ。（中略）我々の生活に於て一瞬間でも煮つまつた場合に立つた経験のある人は誰でも知つてゐるが如く、人は本心から動いてかゝる時には、そこにはもう努力の必要などはなくなつてしまふ。（中略）然しながら、その人の生活はたしかに暗示となる。而して他の人の生命に内部的に働きかけるに違ひない。人類が進化的過程にあるならば、その暗示となつて働きかける力は強く、それを吸収する力も亦強いに違ひない。そこに人生の可能性が成立する。（筆頭語）

ここに見られるのは、「惜みなく愛は奪ふ」にいうところの（本

能的生活)であり、その可能性は論理を越えた、一種の神秘思想である。(註三) ここには、その力を、どこに、何に求めることができるのかという間に答える可能性はない。したがって、いくら、(生来の力が成就する最上のものでありたい) (己れを主とするもの)と願い、(一人の人には必ず一人だけの立ち場のあることを信じよう)、と願ってみても、それは一種の机上の空論の響きを消すことはできないし、(生活は即ち仕事であり、仕事は即ち生活であらねばならぬ) (生活といふこと) と言ってみたとところで、その根幹が曖昧である限り、満足はいく芸術は生まれるはずはない。したがって、生活改善が必須のこととして浮かび上がってくることもないのであり、(今のやうな生活から本當によい仕事が出る余地があるかという声)に脅かされる有島がそこには見えてくる。

\* 問題は、この有島の理想的人間像が、なぜ直接的に第四階級者であるのか、ということである。有島にとつて、あらまほしき状況すべて兼ね備えている存在であり、いまは歴史的事実としてその可能性が外部の抑圧によつて疎外されている存在が、第四階級者だといふのだが、本當にそうか、という基本的な問は、なお、残っているのではないか。つまり、外部的制約がすべて取り払われたとき、その存在の本質においてカインの末裔である者は、いかにして本能的な生活者、あるいはホイットマンのいうローファーであり得るのか、という問に対して、有島は答えていないのではないか、ということなのである。あるいはまた、次のような問も当然生じるであろう。すなわち、有島もまた、自らが告白をしたように、カインの末裔で

はなかつたのか、と。いつ、そのカインの末裔であることに彼らの差が生じてしまったのか、と。

有島にとつて、第四階級とは、「かかん虫」(明四十三・十)における《虫》的存在に端を発し、「カインの末裔」(大七・三)において広岡仁右衛門によつて顕現化され、徹底的に否定的存在であることを嘆かなくてはならなかつた者だつたはずである。そして、彼等が真の人間として復権するためには、(おお君ら世の嫌われ者たちよ、少なくともほくだけは君らを嫌うことなく、直ちに君らの群のまん中に入りこんで、君らを歌う詩人となろう) (註四) という取りなしの存在を必要とする存在であつたことはすでに述べたところである。(註五)

あるいは、(私はありのままに存在する——それで沢山だ) (ホイットマン「自己を歌ふ」と、いつさいの否定性を一挙に肯定へと転換せしめる飛躍の可能性をその背後に持つことなくしては成り立たない論理であつたこともまた、すでに述べたところである。(註六)

\* 第十三番目に位置している「宣言一つ」論の可能性については、磯田光一氏の「宣言一つ」論(註七)の冒頭部に記されている一文、《宣言一つ》を有島武郎の思想的展開のうちに位置づけることについては、すでに安川定男、山田昭夫、渡辺凱一氏らに秀れた研究業績があり、「宣言一つ」の特徴とその思想の功罪に関しても論じつくされてしまった感がある。それらの論考の拠つて立つ基盤に私自身も立つとしたら、私にはつけ加えるべきものは皆無に近いが、よくその実情を伝えている。

この磯田氏の論に、歴史的経過に伴う増補を試みるならば、菊池弘説、江頭太助説、江種満子説などを挙げるべきであろう。(註八) 今そのすべてを参照することはできないが、それらを概観するときに、この宣言が、敗北の宣言であるのか、それとも積極的な意味をもったものであるのかを問うことが、共通の話題である。つまり、取りなしの存在を想定しうる有島であるのか、あるいはまた、内部的エネルギーの存在を確信することのできる有島であるのかを問うことが求められているのである。

この問題を考察するに当たって、磯田氏の論は、特色ある「宣言一つ」論として位置づけられる。なかでも最後に提出されている問題提起の部分は、新しい「宣言一つ」論考察のためのひとつのステップとして大切な発言なのである。

\*

磯田氏の「宣言一つ」の読み方は、基本的には敗北の宣言ではなく、積極的な主張を持ったものとして捉えているところにその特色がある。つまり、氏の、「宣言一つ」の有島は、自分の使命を「第四階級以外の人々に訴へる」ことに局限している(三)ものであるにもかかわらず、それは、有島の「広津氏に答ふ」(大八・一・一八―二十一「朝日新聞」)における芸術家に対する基本的な評論、たとえば、泉鏡花のような純粋な芸術家を第一のタイプとして無条件的に肯定し、自らが属している第二のタイプとしての「そうなりきれないまよいの持ち主」の存在の意味を問う者であるところに表示されているように、へむしる第一のタイプになりきれない迷いが、第三のタイプ(時代に便乗する傾向のある知識人)を批判する方向

有島武郎著作集第十五輯「芸術と生活」を読む(二)——「宣言一つ」を中心として——

に働いているとみられ、有島に前向きの希求があったとしたら、第二の立場をどう積極的に転化するかということであった(二)という指摘は、「宣言一つ」が、たんなる「絶望の宣言」だけではないものであることを、その本質に持っていることを明らかにしていることになる。

これに続いて、へじつは「宣言一つ」をめぐる評価の歴史は、第二の立場の積極的なものへの転化という立場に終始している(二)という研究史の成果を踏まえた発言がなされており、「宣言一つ」の積極的な評価の根拠が提示されているだけでなく、さらに以下のような興味深い問題提起へと続いているのである。

こうして「宣言一つ」の思想が有島の意に反した形で現実の政治過程で実現していったとき、彼はどこへ帰っていったと想定できるであろうか。そしてここで、広津和郎に答えた文中で、純粋な芸術家タイプを有島が全面肯定していたことを思うとき、彼はいくばくかの挫折感をいだきながら、現実に負い目をもつことなく、ひっそりと文学固有の場に帰っていったのではなからうか。(三)

\*

「宣言一つ」の次に配置されている「片信」「想片」は、この著作集の総括の位置あるエッセイである。

「片信」において、「宣言一つ」の意図するところがもう一度確認

されている。これらのエッセイは、歴史的あるいは社会的観点からすれば、「文化の末路」(大十二・一)、「行き詰まれるブルジョア」(大十二・七)と、同工異曲の感を免れ得ないものであるが、本質的には、

あの宣言たるものは僕一個の芸術家としての立場を決めるための宣言であつて、それを凡ての他の人にまであてはめて云はうとしてゐるのではない、

ということであつた。もちろん、そのことは、生活即芸術という考えを持つ有島であることを言えば、芸術論は生活論でもあるが、現実的な役割認識としての労働者の労働運動は労働者の手に委ねて、僕は自分の運動の範囲を中流階級に向け、そこに全力を尽さうとするだらうといふまでだ」というときに、有島のいう、本質的な意味での人間としての否定性、つまりカインの末裔性は、雲散霧消の可能性もあつたのではないだろうか。なぜならば、第四階級者と比較して、〈僕が即今あらん限りの物を握つて、無一文の無産者たる境遇に身を置いたとしても、なほ僕には非常に有利な環境のもとに永年か、つて植ゑ込まれた知識と思想がある〉という有島にとつて、問題になつてゐるのは経済生活上のブルジョア性でしかなく、〈第四階級をいふならば、ブルジョアジーとの私生児でない第四階級に重心をおいて考へなければ間違ふ〉という自覚は、本来、人間存在の否定を表現しているはずのカインの末裔性とは無関係のこととして認識されているかの印象を持つことができるもの言いだからであ

る。

有島は「想片」の中で、

\*

従来 of 言説においては、私は個性の内的衝動に殆んど凡ての重点をおいて物をいつてゐた。各自が自己をこの上なく愛し、それを真の自由と尊貴とに導き行くべき道によつて、突き進んで行く外に、人間の正しい生活といふものはあり得ないと私自身を発表して来た。今でも私はこの立場を聊かも枉げてはゐるものではない。人間には誰にもこの本能が大事に心の中に隠されてゐると私は信じてゐる。(。)

と述べてゐる。そして、そのことが、この本能が環境の不調和によつて伸び切らない時、即ちこの本能の欲求が物質的換算法によつて取扱はれようとする時、〈所謂社会問題なるものが生じて来るのだ〉と説いてゐる。〈環境の不調和あるいは〈物質的換算法〉によつて疎外されている者が、第四階級者であることは言うまでもないことであるが、それに荷担しているのが第三階級者であり、有島がその階級に属している者であるがゆゑの痛みを覚えなくてはならなかつたというのである。

〈衝動の醇化された表現が芸術だ〉と有島は言う。そして基本的に(凡ての人はこの衝動を持つてゐるが故にブルジョアジーとかブルレタリアートとかを超越したところに芸術は存在すべき)もので

あることは承知している有島である。しかし、〈その衝動の醇化が実現された場合のみが芸術の萌芽となり得る〉のであるが、有島の属している〈ブルジョア文化教養〉をもつては、とうてい〈衝動の醇化〉などは望むべくもないというわけである。

一人の芸術家が芸術品を作りますときには、其芸術家の生活がその中心の力となつて居るが、その表現のひとつとしての〈著物〉は〈其時代待つ外にはない〉。〈其芸術家が自分の衷心を表現する時分には、矢張時代々々に依て支配されるといふことは禁じえない。之は御記憶を願ひたい。それだから、芸術作品は、如何なる芸術的作品であつても多少時代というものが反映して居ります。〉(芸術の不変性) という意味において、「宣言一つ」はたしかに〈第四階級〉論でもある。どちらが主であるかといへば、有島が非第四階級者であることの宣言であるという意味で、それはまさに〈自分が属するところの階級の可能性を信ずることが出来ない〉(「想片」)者の、ただひとつ、することのできることとしての〈自己の階級に対して自ら挽歌を歌〉い、〈私が何等かの意味で第三階級の崩壊を助けているとすれば、それは取りもなほさず、第四階級に何者かを与へてゐるのではないか〉(「同前」) という思いの表出は、〈従来の言説に於ては私は個性の内的衝動に殆んど凡ての重点をおいて物をいつてゐた〉有島であり、この衝動の醇化された表現が「芸術だ」と言い、その衝動の醇化の可能性は、もはや〈知識階級の人が長く養はれたブルジョア文化教養を以てその境界に到達すること〉は不可能であるとしてゐることと相俟つて、有島の哀しい敗北宣言であつたといふことも可能であるように思われるのである。

有島武郎著作集第十五輯「芸術と生活」を読む(二)——「宣言一つ」を中心として——

しかし、

若し私の理解が誤つてゐなかつたならば、その唯物史観の背後には、力強い精神的要求が潜んでゐたやうに見える。(「同前」)

というように、マルキシズムというものも、精神性の発露のひとつであるという考え方、〈物的環境は単なる物ではなく、実に生命の一要素である〉という発想は、〈物的環境が正しく調節されることは、生命が正しく成長することである〉といふ論理に接することによつてますますその度合いを増し加えて行くのである。そして、ついに、〈生活革命の後ろに〉(期待した)ものが、〈人間の文化の再建〉、〈人々間の精神的交渉の復活〉、〈最後の期待は、唯物の桎梏から人間性への解放である〉と主張するに及んで、有島の〈自己衝動の考え方と何等矛盾するものではない。生活から環境に働きかけて行く場合、凡ての人は意識的であると、無意識であるとを問はなかつたら、悉くこの衝動によつて動かされると感ずるものである〉という、人間の根源的な衝動に、行動の原理を見出すことができるというような、歴史的、社会的現実を越えた、本質的人間論へと還元されて行く可能性をも内包している論理として展開して行く可能性を秘めているのである。

おそらく論理はここで一巡したことになる。問題は、第三階級と第四階級との宿命論めいた断絶の論理を繰り返すことは、その意味では不毛だということなのである。先にも述べたやうに、有島の

基本的な人間観の表現である、我、他人ともにカインの末裔ならざるはなしという認識は、本質的には階級を越えたものであるはずだから、である。

\*

ところで、磯田氏の、先の問題提起、文学固有の場への回帰論にあわせてなされている〈宣言一つ〉の「第四階級」のうちに「カインの末裔」の余韻を読んだら行きすぎになる(が) (三) という指摘は、消極的な文脈のなかで述べられてはいるが、有島の精神史にあつては、大変重要な指摘であるように思われる。

なぜならば、有島は、我、他人ともにカインの末裔ならざるはなし、と観じなければならなかつた者であるがゆえに、カインの末裔の復権を願う者であり、また、そのことを可能にする存在があるように、と切望していたことは、有島が編集した著作集にエビグラフとして掲げられているホイットマン詩によつて明らかであることについては、すでに述べてきたところだからある。(註九)

先にも指摘したように、有島にとつての〈カインの末裔〉意識とは、「かかん虫」の〈虫〉としての人間から、「カインの末裔」を経て、予測としては「独断者の会話」(大十二・六)に至るまでのすべての作品において明らかであると思われるように、基本的な否定的人間観をその内容とするものであると同時に、社会や時代の異端者、傍流者であつた者が、いまやカインの末裔であることの、人間としての正統的存在性の回復を切望せざるを得ないものを内包していたはずである。それが、〈あなた〉と呼びかけてくれる存在であることは、著作集第一輯のエビグラフ以来のことであつたことも

またすでに述べたことである(註一〇)し、とくに第三輯「カインの末裔」のホイットマン詩によるエビグラフ、〈おお君らの世の嫌われ者たちよ、少なくともぼくだけは君らを嫌うことなく、直ちに君らのまん中に入りこんで、君らを歌う詩人となろう、／他の誰に對してよりもまず君らにこそ愛をそそごう〉は象徴的なのである。

問題は、このところに、カイン讃歌を歌う詩人への期待が示されていると同時に、有島もまたそのひとりであろうとする希望を持つた者であることが示されていることなのである。『生れ出る悩み』(大七・九)の広告文、〈私は『生れ出る悩み』に於いて凡て、誕生を待つよき魂に對する謙遜な讃歌を唱へようとした。自然は大きな産褥だ。私はその産褥の一隅につ、ましく坐つて華やかな誕生を祝する歌手でありたい〉、からもそのことは明らかである。

繰り返して問うことになるのだが、本来ならば、我、他人ともにカインの末裔ならざるはなし、と観じた有島であるならば、何故に自分だけが第四階級者との間にある〈異邦人性〉を述べて、敗北者宣言と思われるような非第四階級者宣言をしなければならなかつたのであろうか。我、他人ともに人間であるがゆえの、カインの末裔性をいうのであれば、階級を越えてその存在の本質においてカインの末裔であるとの認識を持つべきではなかつたのか。なぜ、有島だけが、ついに復権することのできないカインの末裔として、永遠にさまよい歩き続けなくてはならない〈盲目の群〉(大洪水の前)「大八・十」でしかない者としての自己認識をもたなければならなかつたのであろう。



\*

じつは、このところに、へひつそりと文学固有の場に帰っていかうとしている有島発見の可能性が秘められているのではないかと思われるのである。

その意味では、有島の期待する「文学個有の場」とは、著作第十五輯『芸術と生活』のエピグラフとして掲げられているホイットマン詩「未来の詩人たちよ」の一節、

すつかり立ちどまつてしまふことなく放浪をつづけ、行きずりにあなた方を眺めもするがそれからすぐに顔をそむけ、／その視線の意味を証明したり定義したりすることはあなた方にまかせて、／かんじんの大仕事はあなた方に果たしてもらえと期待をかけているわたし。(一)

において表現されている、詩もしくは詩人性の成立する場のことだったのではないだろうか。

エピグラフとして掲げられているのは、詩篇の後半の部分であるが、全体を通して読むときに、〈未来の詩人たち〉が、〈わたしの真価を認めてくれる〉存在であり、新しい可能性をもった存在であると同時に、〈蘭のなかに〉消えて行くべき者が、最後の望みを託することのできる存在として期待されていることがよくわかることである。

有島の、非第四階級者であるという自己認識の背後には、時代と社会に彩りされた衣を着ることのできない者であることの自己認識

があるが、本質的には、理想とするところの本能的生活者にはまだほど遠い存在であることの認識があるように思われる。そのような状況にある有島にとって、〈詩人〉とは、その時々とその時代の衣を着せられてはいるものの、本質的には、有島の理想像に対するひとつの表現として、あるいは、その期待に応えることのできる存在として位置づけられていたことを想起すべきである。(註一一)

「心に沁みる人々」において、〈ただ二つの活路を詩に求めた〉〈A〉でありながら、〈Aにあつては詩もまた重すぎた〉と言わざるを得なかつたところに、有島の苦悩に満ちた魂の軌跡を見ることができるのであるが、このところに、非第四階級者、つまり、非ローファアの滅亡を語る「文化の末路」(大十二・一)に達着しなくてはならなかつた有島を見ることができると同時に、なればこそ、論理を越えて一気に、〈長い間惚れ〉ていた詩の世界に、あえて自分を〈鑄込まうとするに至つた〉(「詩への逸脱」大十二・四)有島でもあつたことを想起することもまた可能なのである。

それが、有島にとつて結果としていかに有効であつたかは別問題であるが、磯田氏の言う「文学固有の場」への回帰の可能性の指摘には、詩人ではあり得ない有島が、真の詩人の到来に期待するものであること切なる者であつたことをみごとに言い当てていることになる。その詩、もしくは詩人性への回帰願望を、「宣言一つ」を中心とする著作集第十五輯『芸術と生活』というひとまとまりのエッセイ群を、エピグラフとの関連において読むことによつて明らかにすることができたように思われるのである。

【註】

註一 「宣言一つ」試論（『国文学解釈と鑑賞』平元・二）

註二 「有島武郎著作集第十五輯『芸術と生活』を読む（一）——エピグラフ解釈を中心にして——」（梅光女学院大学「日本文学研究」第三十一号 平八・一）

註三 拙論「有島武郎の神秘思想」（有島武郎研究叢書第七集『有島武郎とキリスト教』一九九五・八 右文書院）

註四 「天然に帰る瞬間よ」（杉本喬、鍋島能弘、酒本雅之訳 ホイツトマン詩集『草の葉』昭四十四・五 岩波文庫）

註五 「有島武郎研究——詩への逸脱をめぐる（三）——」（梅光女学院大学「日本文学研究」第十三号 昭五十二・十一）

註六 「有島武郎著作集第十一輯『惜みなく愛は奪ふ』を読む（一）——エピグラフ解釈・自註分析を中心に——」（梅光女学院大学「日本文学研究」第二十三号 昭六十二・十一）

註七 「宣言一つ——半世紀後の帰結から——」（安川定男、上杉省和編『作品論有島武郎』昭五十六・六 双文社出版）

註八 菊地 弘「宣言一つ」と農地解放」（『有島武郎』昭六十一・十 審美社）

江頭太助「宣言一つ」の成立への道程、「宣言一つ」の文脈」（『有島武郎の研究』一九九二・六 朝文社）

江種満子「有島武郎著作集第十五輯『芸術と生活』をめぐるノート——芸術家、労働者、女性——」（有島武郎研究叢書第四集『有島武郎の評論』一九九六・六 右文書院）

註九 註四に同じ。

註一〇 「有島武郎研究——詩への逸脱をめぐる（二）——」（梅光女学院大学「日本文学研究」第十二号 昭五十一・十二）

註一一 註二に同じ。

【付記】

有島のカインの末裔意識の特色や、詩に対する関心、あるいはエピグラフとの関連において有島武郎著作集を読むことの意味などについては、註に掲げた拙論の他に、「有島武郎の詩と試論」に関する拙論（有島武郎研究——詩への逸脱）をめぐる（一）——「有島武郎著作集第十四輯『星座』を読む（二）」（梅光女学院大学「日本文学研究」第十一号、第三十号 昭五十・十一、平七・二）において論究してきた一連の論考がある。

なお、註一の論の骨子は、本論において生かしている。